

# 奈弓連だより

通巻 241 号

令和 4 年 3 月号

発行 奈良県弓道連盟

会長 西中 正

編集担当 松澤和実 中西省五

連絡先：[henshu@narakyudo.jp](mailto:henshu@narakyudo.jp)

## 令和 3 年度称号者研修会

### 指導者としての心得に重点を置き、指導できる一つの射礼の体配を研修

主任講師：範士九段 吉本清信先生

講師：教士八段 須田三郎先生

令和 4 年 2 月 19 日 教士の部 参加者 23 名

令和 4 年 2 月 20 日 錬士の部 参加者 18 名

場所：橿原公苑弓道場

令和 3 年度の称号者研修会を、上記日程で開催しました。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、宿泊研修を中止し、教士の部と錬士の部に分けて開催しました。錬士の部では、今年度は 6 名が初参加でした。錬士六段の一部の方は、人数調整のため教士の部に参加頂きました。

「指導者としての心得」に重点を置き、指導者として、指導できる一つの射礼の体配を習得することを目的とした研修を行いました。

#### ●教士の部



一手行射

1 日目の教士の部では、一手行射、須田先生の講話の後、前後 2 射場に分かれて一つの射礼を全受講生が 2 回行いました。立ち順を、1 回目五十音順、2 回目年齢順とし、同じメンバーにならないように立を組みました。最後に、1 射場で選抜メンバーによる三立の射礼を行いました。



教士の部 一つの射礼研修

#### 【須田先生ご講話】



ご講話をされる須田先生

- ・失敗から学ぶことは大切である。失敗したことはただ失敗したことで終わらせないで、その失敗をどう生かすかという事が大切である。
- ・個性のある射をするために基本が大切である。書道では、書聖王羲之の書を、徹底的に何度も繰り返し真似をし、基本を身につけ、その後個性が光っていくといわれる。
- ・厳しい指導に批判的な風潮もあるが、指導するときには、厳しいことを言うてはいけないという事ではない。相手がどう受け止めるかということを考えることが大事。指導者と生徒の人間関係がとても大切である。
- ・自分が指導を受けるときは、どんな指導も受け止めるという意識で指導を受けることも大事。
- ・弓道誌 2017 年 3 月号から 11 月号までの間で 8 回連載された、沖縄の高校の先生の、新垣真理先生の「私の弓道指導 奮戦記」を読むことをお勧めする。指導者として頑張ってこられた素晴らしいお話。
- ・高校生を指導していた時は、弓道部の生徒が学校を卒業してからも弓を続けてくれるような指導を心掛けていた。
- ・射品・射格を磨くには、美的な感覚を養成することも大切。射礼の体配や、奈良の増田先生が考案された襷掛けなど、美しさを意識して取り入れられているものもある。着装の意識も重要である。

## 【1日目のご講評より】

### 〈須田先生〉

皆さんが書いた自分の課題には射技に関することが多く、体配に関しての記述は少なかった。指導者として美しい射品・射格を目指して、氣息と協した動作を勉強してほしい。そのためにはもっと射礼の練習を積み重ねお互いに注意し合いながら細かい動作も修練を積んでいき、無駄のない動きを習得することが必要である。そして指導者としてそのようなところに目を配りながら後進を育てていくことが大切である。

### 〈吉本先生〉

射礼を見ていて思ったことは、お互いの気持ちが合うか合わないかということである。気持ちが合っていれば見ている方も気持ちが良い。気持ちがそろわないと言うことはどうしたらよいのか、と言う事がこれからの大きな課題である。一人練習ではなく、お互いに見合いながら練習する事が大切。



教士の部 1射場での一つの射礼

### ●錬士の部

錬士の部では、一手行射、吉本先生の講話の後、射技研修の時間を設け、各先生に一手の射技指導を受けました。

射礼研修の前に、初参加の受講生も多かったため、位取りについての講習を行い、その後、教士の部と同じように、2射場での一つの射礼研修2回、1射場での選抜二立の一つの射礼を行いました。



錬士の部 射技指導

## 【吉本先生ご講話】

弓道教本は指導の基本となるものであり、弓礼弓法問答集は教本を補うものとして作られておりこれらに従って審査等を行っている。教本や問答集が、何を言わんとしているかを考えて、中身をしっかりと使う必要がある。決まっていることと決まっていないことをきちんと線引きして理解・整理することが大切である（教本も問答集も必要に応じて改訂されていくものである）。



錬士の部 一つの射礼研修

## 【位取りについて】

◆位取りは道具を持たずに行う

◆一つの射礼での位取りのポイント

(★印は全員で打合せしておくのと良いポイント)

★入場から定め座までのルートと定め座での3人の位置関係（落中心に）

★定め座から脇正面に向かう際のルート、曲がる場所（大前中心に）

★脇正面に向かって歩いたところから、的正面に向きを変えて、何歩進むか（大前中心に）

★本座から定め座に向かうルートまで何歩下がるか（大前中心に）

○大前：脇正面に向きを変える位置

○大前、落：乙矢を引き終わり、射位から本座に下がる際の位置と歩数（下がる際は原則7歩とされているので、7歩で元の本座の位置まで戻ることが出来るか。元の本座の位置に戻れない場合は歩数が増えても可）

◆間隔について

特に決まっていないが、最初に的正面を向いた時の間隔は、広い道場であれば1.8メートル位が妥当ではないか。すべて、道場の広さに応じて決める必要がある。

◆落が最初に入る射位の位置と、三角形の形でとる頂点の場所は必ずしも一致しない。

◆入場から定め座までのルートについて  
決まりはないので、道場の広さに応じて決め、3人が同じルートを通るように統一しておくほうが良い。

#### 【2日目ご講評より】

##### 〈須田先生〉

皆さんの一生懸命さを感じ、指導する内容をよく理解しようしていると思った。

弦の手入れ等、道具の手入れを怠りなくするという基本が出来ていない人もいた。

基本の動作や姿勢を大切に、その上で射技があるということを忘れないでほしい。的中ばかりを求める弓道ではなく、基本を大事にして、射を勉強して、そのうえで競技会に出て、お互いに自分と戦う、人と戦うということが、弓を楽しむということと思う。基本を大事にして弓を楽しんで、後輩を育てていただきたい。

##### 〈吉本先生〉

錬士の称号というのは、次に向かってということが大きな課題としてある。そこに向かうために、どうお手伝いできるかということで今日一日、一緒に勉強させてもらった。

これを機会に、より、更に上を目指して一緒に頑張ってもらえたらいいなと思う。



ご講評をされる吉本先生

吉本先生、須田先生、ありがとうございました。  
本記事は、記録係の受講生の記録を元に作成させていただきました。

昨年度同様、新型コロナウイルスの関係で各部1

日の開催となりましたが、受講生も熱心に受講いただき、充実した研修となりました。ありがとうございました。

(指導部 吉本清巳)

## 地連審査講習会

### 短い時間の中で集中して取り組む

2月27日、樫原公苑弓道場にて地連審査講習会が行われました。西中会長、阪中理事長を講師にお迎えし、体配の指導を指導部員が担当しました。

新型コロナウイルス感染防止のために、講習を三部に分け、一部12名、二部14名、三部13名の参加者により行われました。一部二部は、級位から参段までを受審の方、三部は四段・五段受審の方が対象でした。

一部二部の開会式後、吉本指導部長より、審査での4人立、3人立の退場と、大前の心得について説明がありました。退場の時、的が5つで4人立ちの場合は、4番の射手は5番まで下がり、向きを変えて本座まで真っ直ぐ進み、本座を過ぎたら最短距離で退場口まで進む。次の立ちの大前は、引き終えた射手が5番まで下がるのを待ってから、射位に進む。的が5つで3人立ちの時、3番の射手は5番まで下がらずに前に退場する。審査では大前が先導者であり、揃った体配をするには大前の役割が重要で、後ろの射手に対する心くばりが大切であるという説明がありました。

一部二部は、まず一手行射、そのあと3グループに分かれて入退場、坐射の体配、失の処理の研修、最後に仕上げの一手行射を行いました。二部では、西中会長、阪中理事長にも体配の指導に入ってもらいました。受講生は熱心に聞いて取り組んでいました。三部では、一手行射の後、四段受審者は講師による射技指導、五段受審者は肌脱ぎ、襷がけについて研修し、仕上げの一手行射で終了しました。

最初の一手行射は、樫原での審査と同じように行われたので、講習生は緊張していました。最後の仕上げの一手行射では、西中会長より、講習の成果もあって入場や体配が良くなっていたとの講評を頂きました。

マスクを外した状態で会話をしない等、コロナ感染防止に気を付けながらでしたが、ほんの少し寒さが和らいだ一日に貴重な講習会を行うことができました。

(指導部 白井礼子)

## 弾工房 探訪 ②

— 象水さんを訪ねて —

前回に引き続き、象水さんの工房紹介です。工房には見たことのないミシンや機械があります。



ポストミシン



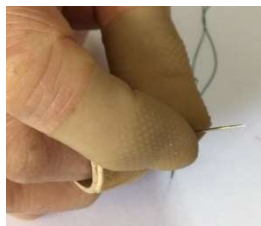
皮漉機



八方ミシン



弾にはたくさんの縫い目がありますが、指の所以外はほとんど手縫いです。一の腰と二の腰の境界部分は、ミシンで縫い目をつけ手で縫っていくそうです。縫い針は手術で使うような鍵針や革製品を縫うときに使う断面が三角の針を想像して



いましたが、驚いたことに普通の縫い針でした。三角の針は皮を裂いてしまい皮に優しくないため、小さい細い縫い針で細いミシン糸を使用しています。昔の弾師は皮が裂ける前に糸が切れるよう絹糸を使用していました。糸が切れてしまったときの応急手当として、ボンドを使用する



小さな使いこまれた道具たち

るのはよいのですが、瞬間接着剤を使うと皮が固くなってしまい、針が通らなくなるので、木工用ボンド等でつけてほしいとのこと。象水さんの弾は溝部分にくすねではなく、樹脂を塗っており、ゆっくり固まる樹脂を4-5時間かけて加熱しながら感想させます。樹脂はサラサラの液体で、溝を覆う白い皮（腹皮）に筆で塗ります。ゆっくりと浸み込ませていくことで、皮自体が樹脂化するのだそうです。溝の修理にくすねをつけたり鮫皮を貼ったり、熱を加えた工具で押すことはお勧めできないそうです。また弾が離れでどうなっているのか考えてほしいとも。溝が引っかかるからと山を浅く削っ

ては、溝がないことで弾が抜ける恐怖心が出たり、弓手が効く前に矢が出て前へ飛ぶようになり良くない



とおっしゃっていました。弾の研究には余念がない象水さんですが、今研究中なのが、諸弾。諸弾自体はいくつも作成されていますが、手の平部分の皮のだぶつきが気になり、東香川市の手袋の博物館に行ったりして洋の考えを取り入れ、新しい型紙で作成されました。以前の諸弾は手の中のだぶつき部に切れ込みを入れる工夫をしていましたが、現在は、



裁断の形が工夫され、またひと手間かかっています。また昔の弾も色々お持ちで熱心に研究

左:以前のもの 右:現在のもの されています。さて、

新しく弾を作成する人は、何か上手くないか、弾が壊れた等の理由が多いそうですが、新しい弾にしても前の弾になじんだ離れをしてしまう傾向にあるようです。溝の深さとか前の弾と丸きり同じものはできないので、新しい弾にしたならそちらに順応していくように、前の弾と交代で使うようなことはせずきっぱりと切り替え、新しい弾が自分に合うまで練習してからまた前の弾に戻るのもよいでしょうとのこと。象水さんも弓を引かれる方なので、よく新しい弾で練習されているのをお見掛けします。同じ弓手であれば、射への影響は弾にある、と。自分が離れたと思った時と離れたタイムラグ。緩みの影響。帽子の中がどうなっているのか。研究は続くようです。

弾工房

象水 (しょうすい)

井戸上博一 弾師

奈良県在住



弾工房にて

### 編 | 集 | 後 | 記

今回は、研修・講習の記事が大部分を占め、特に体配の重要性について改めて考えさせられました。また、弾を作っておられる方の思いに触れることができました。道具とも今一度きちんと向き合っていきたいものですね。 (編集担当 中西省五)